

11の多様な授業記録を
読もう！～一斉・協同・
オルタナティブ～

自分が自分であること を学ぶ学校 ～ESDは今ここから、自分か ら始まる～

1 こどもの森とは

2018年5月14日(月)。約2ヶ月ぶりにやって来たのは、前任校である「認定NPO法人箕面こどもの森学園」。現在55名(小学部42名、中学部13名)の子どもたちが通う、小さなオルタナティブスクールです。

オルタナティブとは「従来とは異なる、もう一つの」といった意味を含んでいる言葉で、この学校は「大阪に新しい学校を」というスローガンのもとに集った市民の手によって作られました。今年で創立15周年を迎えた「こどもの森」は、国内外

のさまざまな教育を参考にしつつ、

独自の理念とカリキュラムで運営されています。その地道な取り組みは、徐々に公の機関にも認められるところとなり、2015年にはユネスコスクールとして認証され、2016年には文科省委託事業にて

全国24のESD推進校のうちの1校にも選ばれています。新学習指導要領のキーワードとして注目されるようになったESD(持続可能な開発のための教育)。それに取り組む学校が、既に15年も前から始まっていたので

濱 大輔 (はま・だいすけ)

鳥根県益田市立吉田小学校講師(元認定NPO法人箕面こどもの森学園スタッフ)。教職10年目、「よい教育とは何か？」を実践の場を通して試行錯誤し続けてきました。2017年、オランダ・イェナプラン教育専門教員資格取得。新学習指導要領のキーワードでもあるESDを軸に、いま日本の教育界が最も学ばべき先駆者の取り組みを克明に描きます。

2 朝のハッピータイム

こどもの森の1日は、朝のハッピータイムから始まります。ハッピータイムとは、クラスに円形に置かれたベンチに全てのメンバーの顔が見える状態で腰掛け、今の気持ちや昨

日の出来事など、その時自分の中から湧いてくるものをそのまま表に出すことの出来る場です。立候補した子が司会をし、発言権は一人ずつ順番に回ってきます。この時、発言

	月	火	水	木	金
9:00~9:20	ハッピータイム				
9:20~10:00	ことば・かす	ことば・かす	ことば・かす	ことば・かす	ことば・かす
10:10~10:50	ことば共有				
11:00~11:40	スクールワーク	テーマ	プロジェクト・選択	テーマ	学習指導
11:40~13:00	昼休み		ミニイベント・選択	昼休み	
13:00~13:55	プロジェクト・選択	プロジェクト・選択		自由活動	プロジェクト
14:00~14:40			プロジェクト・選択		
14:40~15:00	ミーティング・総括		ミーティング・総括		

しないことも選ぶことができ、一人ひとりの存在や選択を最大限に尊重しようという学園を象徴するような時間です。この日も、既に小4～小6の子どもたちがサークルになって集まっていました。(この学校ではフレネ教育やイェナプラン教育にも学び、3学年の異年齢学級のシステムを採用しています。)

3 ことば・かず

続いて、「ことば・かず」の時間。これは、子どもたちが作成した学習計画表に基づいて自立的に学ぶ時間で、いつ、どこで、誰と、何を、どのように学ぶか、ほとんどのことを子どもたち自身が決めることができます。算数は遠山啓によって開発された水道方式のテキストと算数・数学を専門とするベテランスタッフたちによって編集されたプリント集が共通のものとして用いられ、小学部6年間を終えるまでにこれらの内容

を学ぶことが目安として示されています。国語の取り組みとしては、フレネ教育の中心的な実践である自由作文(題材を自由に選択して書く作文)が柱として据えられ、その他にも読書、理科や社会のテキスト、自分で持ち込んだ算数の問題集や、進研ゼミの学習ゲームなどに取り組む子どもいます。この時、誰一人として同じことをしている子はいません。

座席はフリーアドレス。これは昨年度の2学期から高学年クラスで導入している方式で、子どもたちには指定の座席というものがありません。アイランド形式の机に集まった



メンバーは、過度に干渉し合うのもなく、かといって孤立するのでもなく、各々が自立

的に学んでいます。あるグループでは、こんなやりとりがありました。

「ねえ、ねえ、使つてないシャープンは?」「あるよ」「ありがと」

「それ、ピチュウっていうん?」

「うん、ピカチュウの進化系」

「へえ、そうなんだ」

これは4年生の男の子と5年生・6年生の女の子のやり取り。ポケモンの映画を見たことを自由作文に書いている男の子は、年上の女の子たちの中で、安心して学習に取り組んでいるようでした。また、時折5年生の女の子が書いている自由作文に目をやってもいます。自分の書いた文章と見比べているようでした。そして、こういった関わりの後にはすぐに各自の課題にスッと戻っていきます。ここには敢えて殊更に「学び合おう!」などと言う大人は一人もいません。それにも関わらず、子ど

私たちは実に自然に学び合っているのです。当然ながら、チャイムもありません。開始時、スタツフ(子どもたちの学びを支える大人はスタツフと名乗り、子どもたちもニツクネームや呼び捨てで呼んだりしています)がわずかに部屋を空けている時間がありました。それに気づいたある子は、「あれ？ スタツフいないや」とつぶやいたものの、それを全く気にするそぶりを見せず、誰に指示されるのもなくさっさと自分の学習に取り組んでいきました。こうした子どもたちの圧倒的な自律性(Autonomy)に、ぼくは改めて衝撃を受けたのでした。

4 てつがく対話

続く時間は、ことば共同。ことばに関する学習に、複数人共同で取り組む時間です。この日は高学年が二つのグループに分かれて、それぞれに「てつがく」。学園では、『小さな

哲学者たち』というフランスの幼稚園での哲学対話のドキュメンタリーにヒントを得て、2011年から継続的に取り組んでいます。まずは、この日までに子どもたちから出されていたテーマの候補を、担当スタツフの藤丸さん(愛称…まるちゃん、まる)がホワイトボードに書き出します。「人生って何？ 幸せって思うって、どんな時？ 無限って何？ 人の価値って何？ この世界は本当に存在するのか？」

そして、テーマ決めからてつがく対話が始まっています(以下、2グループの内1グループを取り上げる。子ども9名。スタツフ1名。子どもの名前は仮名)。あい「1回投票する？」まる「それか、これやりたいっていうのある？」たかし「人生って何？」まる「1回聞かか」一旦、今日のテーマを決めるための投票。まる「みんな

それぞれあるんやね。とりあえず『人生って何？』をやる？ 人数多いから。なみとてつおがよければいいけど。いい？」けいこ「はい！」まる「あ、けいちゃんごめんね。じゃあ、1回一人で考えてみようか。セルフで」しばし沈黙。まる「よし、考えた？」けいこ「人の生きる道」たかし「あー、同じ」まる「なんてったつけ？」けいこ「人の生きる道と生きた道」てつお「えー、意味わからん」あい「生きる道が未来、これまでが過去？ なんかさあ、今はどこ？ って気になる」けいこ「なんか今は今って人生を送ってる」あい「なんか人生って重くなりがち」まる「てつお、今は何の時間？ 哲学どうやるって言ったつけ？」あい「なんか…旅！」まる「あー、旅！ かつこいいね。どんな旅？ 人生ってどんな旅ですか？」あい

「なんか木みたいになつてるんじゃないの？ あー、なんか枝があつて分かれている、みたいな」てつお「いつかは折れるのでー。分かれ道とか、古くなったら」あい「おもしろーい！」まる「どういうこと？ すごくいいこと言ってるで。どういうイメージかな？」あい「木も上と下に分かれてる」けいこ「悲しい話になるけど、木って切られたら終わってしまうやん。だから、終わってしまう。事故とか」あい「でも、根っこは残るから」てつお「道が生まれ変わるって意味」あい「なんかてつおすごいこと言う」ともこ「過去ばっかり気にしてる人は上に上がって行きたい」あい「動物は今しか考えてないから、私は犬みたいに生きていきたい」たかし「でも、なんか今ばっかり考えてたらちよつと危ない気がする」てつお「例えば、交通

事故にあつたらもう未来はないから」まる「だから未来も考えないと、つてことね？ なるほど、そういう考えもある。まみちゃんはどうか今楽しい？ これからのこと考える？ 昔は、とか考える？」まみ「……」たかし「私の将来が、「テーマ学習」と呼ばれる総合学習の取り組みのテーマの一つ）で人生のこと考えた気がする」まる「将来っていうと、人生つてのとはまた違う感じ？」たかし「違うことはないけど、人生つてのは今のことを考えてる気がする。将来つてのはこれからのこと。イメージだけど」まる「私の人生どうなるんだらう、つて考えたことある？」あい「まあまあ、ある。将来の夢とか考えたりもするけど、そんなにいつもは考えない」まる「せりちゃんは？ 難しい？ なみちゃんは？」なみ「わかんない」まる「わ

かんないよねー」ともこ「なんかこれまでの積み重ねで今がある、つて思う」まる「なかなか深いなあ。あと10分くらい。(人生つて) 自分で決めているものかな？」あい「すべてが関係してくると思う。自分でも決めていけるけど、他の人の言葉で変わることもあるし、大きなことは神様が決めてると思う。全部自分で決められるわけじゃないけど、神様が決めていることもあるから、半分半分。だから、この括りではあるけど、その中では決められる、みたいな」ともこ「違う話になるけど、神様っているのかなあ？」あい「いると思う」てつお「キリストじゃないの？」まる「どうなんやろうなあ。どう？ 今日何も言つてない人は。人生つてどんなもんだと思う？」なみ「楽しい！」てつお「怖い。」たかし「寂しい。だって、友達との出会いと別れ

がある」「てつお「寒い」「あい」「どう
いうこと?」「てつお「なんかいろん
な意味を込めて。俺もよくわからん
けど、なんか冷たい」「あい「どんな
色のイメージなのかな?」「てつお
「黒!」まる「好きな色じゃない
で?」「てつお「でも、好きな色だか
ら。緑と青が合わさったみたいいな」
ともこ「その時によって違う。虹色」
あい「あー、なるほど」まる「ゆり
ちゃんは? 難しいよね。まみちゃ
んは? みどりちゃんは?」「みどり
「黄色。なんか太陽っぽいから」た
かし「オレンジと青」まる「なんか
バレンシアな感じ? 青にもいろい
ろあるよ? どんな感じ?」「たかし
「水色」まる「爽やかだね」ゆり「な
んか今の色はこうだけど、大人にな
ったらだんだん自分の色がわかって
くる」てつお「透明。白と透明は違
う」まる「泡?」「てつお「見えやす

い」まる「なんかいろいろ出たね」
あい「なんかそれぞれの色があるか
らさあ、その時々で変わる」まる
「色が同じになる必要はないやんな
あ。てつおは楽しい?」「てつお「フ
ツ」ともこ「白はいろんな色に変
わるから」あい「ぼかし絵」まる
「50分までやな。今日はなんか書い
てもらおうと思ったけど、いいかな
ー。この続きどうしようか?」「あい
「なんか絵に描いてもいいかも」た
かし「違うこととしても面白いかな
ー」ともこ「チームに分かれて話し
合ったことを伝えても」ゆり「ゆり
は違うのやりたいな、って思った」
まる「じゃあ、とにかく今日はこれ
で終わります」

しようとしていることを感じさせる
ものであったことです。子どもたち
は、自分を表現するために最もふさ
わしい言葉を探すことを通して、自
分自身がどういう存在であるのかを
探っているようでした。そしてこの
間、子どもたちは誰かに期待される
答えを述べるようなことはなく、終
始自分自身であり続けていたのです。

**5 大人がホンモノである
ということ**

この自分自身であるということ
は、スタッフの藤丸(まる)さんか
らも感じられました。ぼくにはこの
時の彼を何かの役割を演じている人
ではなく、限りなく彼そのものである
としか思えませんでした。彼自
身、授業後のインタビューでこう語
ってくれました。

「自分のことをフアシリターと
思ったことはない、かな。もちろんテ

イーチャーでもないし。何かを理論立てて言えるわけじゃないけど、二つじゃない方がいいとは思ってるかな」

オルタナティブ教育の世界では、オーセンティシテイ（ホンモノ性）という言葉がよく用いられます。子どもと関わる大人がホンモノであるとはどういうことなのでしょう。それは長らく唱えられてきた学級経営の理論では説明できないもののような気がします。それは敢えて例えるなら、学級が「カラルなビー玉を寄せ集めて作ったランプ」のようになることかもしれません。それぞれのビー玉は直接的にも間接的にも繋がっていて、それぞれに重なり合うことで独特の色彩を放っている。その中の、一つの大きなビー玉が教師。教師と子どもは一粒ひと粒ハッキリとした輪郭や色を持っていて、確固とした個がそこにある。教師はあくまで一つのビー玉として価値



観を率直に表明するし、大きいからこそその影響力もまた大きい。けれど、その大きなビー玉一つの色が、

全てのビーズのそれを支配することはない。そんな個を尊重した新しい学級、学校の在り方を、ぼくらはこの学園から学ぶべきだと強く感じました。

6 ESDは今ここから、自分から始まる

最後に、校長の藤田さんに「公立校の先生たちに伝えたいことは？」と尋ねると、次のようなメッセージを残してくれました。

「自分らしくあれたいいな、と思います。自分のやりたいことを大切にしてみてください。自分が何が好きかを分かっています、それが実現できる学校であってくれたらいいな、って」

繰り返される「自分」という言葉

に、ぼくはESDの、そしてこれからの教育の根幹を見せられたような気がしました。ぼくらは日々の学校の中で、どれだけ「自分」でいられているでしょうか。どこかの誰かに期待される「先生」として振舞ってはいるのでしょうか。その振る舞いは、自分の本心からの動機づけに従ったものでしょうか。こどもの森は、「自分が自分であることを学ぶ学校」でした。そこは、自分が自分であり続けようとする大人たちによって作られ、そんな場で子どもたちは日々自分であり続けています。そして、そこで育った人たちはきっと「自分が自分でいられる社会」を作っています。ESDは今ここから、自分から始まる。こどもの森は、ぼくらにそう語りかけているような気がするのです。